

イギリス科ニューズレター

No. 20 / Sept. 2012

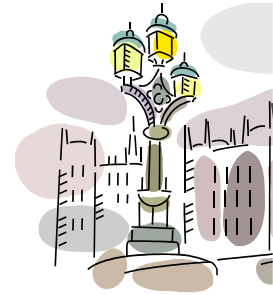
東京大学教養学部地域文化研究学科イギリス分科

〒153-8902 東京都目黒区駒場3-8-1 (8号館402号室)

Tel/Fax 03-5454-6304 (イギリス科研究室直通)

Email: [british\[at\]markjask.c.u-toyo.ac.jp](mailto:british[at]markjask.c.u-toyo.ac.jp)

Web Page: <http://british-section.c.u-tokyo.ac.jp>



主任ご挨拶

西川 杉子

この4月にアルヴィ宮本なほ子先生からイギリス科主任を引き継いだ。駒場に来て6年が経ち、いい加減、東大のシステムに慣れてもよい時期なのだが、まだまだ至らないところばかりで、冷や汗と赤面の日々である。

もともと駒場は変化の絶えないところだが、今年度は後期課程の改革が行われ、イギリス科の正式名称も「イギリス地域文化研究」から「イギリス研究コース」に変更された。スタッフにも変化があり、これまでイギリス科のためにたいへんご尽力いただいた斎藤兆史先生が、本郷の教育学部に転任された。斎藤先生が去られた跡を埋めるのは並大抵のことではない。ただ、新しい戦力もある。イギリス科の卒業生であり、昨年パーミンガム大学で博士号を取られた澤田望さんが、この4月から教務補佐として、奮闘してくれている。また、論文指導担当として、ピーター・ロビンソン先生をお迎えした。みなさんのご協力を得て、これから二年間、主任の職責を果たして行ければと考えている。

私の専門は近世イングランド史をヨーロッパ大陸との結びつきのなかで再検討を試みるもので、特に、宗教的亡命者たちの思想・活動・ネットワークを中心に研究・調査を行っ

ている。従って、研究もヨーロッパ大陸で行う機会が多い。幾度もヒースロー空港から大陸へかけていくうちに、イギリス史研究の最大の利点は、ヨーロッパのほぼどこへ行っても食事が美味しく感じられることだと思うようになった。

もっとも長年「イギリス」とつきあううちに、それなりの愛着も生まれた。長年住んだパディントン駅周辺地域にも Hassliebe といえる思いがあるが、とりわけウスタは、懐かしい。この町を見下ろす丘の上に引退した大学教員Dさんの家があり、私はよくお邪魔していたが、その後博士論文がほぼ完成してから審査が終わるまでは、ロンドンの下宿を引き払ってそこにお世話になった。窓からは、ウスタ大聖堂の向こうに、モーヴァンまで続く丘陵が広がっていて、旅心が刺激された。朝つゆで丘陵が銀色に輝く冬の光景など、今でも夢のなかにでてくる。

イギリス科では、AIKOMなどを利用して、積極的に海外に出て行く学生が多いが、本ばかりでなく足で歩いて、思いっきり異国の空気を吸ってきたいと思う。

ところで、今年も10月20日にホームカミングデーが開催される。イギリス科も午後にコモンルーム (8号館402号

室) を解放しますので、卒業生の方々など、ぜひおいでください。そこに変わらぬイギリス科の空気を感じていただけるように、努力したいと思います。



新任のご挨拶

Peter Robinson

It is very gratifying to be presented with this opportunity to formally introduce myself to the British Studies Section, especially since I have already had the pleasure of teaching some British Studies students. I am not altogether a stranger to the University of Tokyo, having worked within the ALESS Program (2008-2011), before taking up a year's Visiting Fellowship at the Institute of Historical Research, University of London. I also have a familial connection with the section which has further strengthened my attachment to it. What has struck me in the first few months that I have been teaching students is the very great sense of identity and belonging that students have to the section:

with intimate relationships between students, staff and support members which are of the most fruitful kind, both for the honing of academic faculties and for personal development.

A little bit more about me. I am a great believer in the strengths of the polymath (though this may be a little old-fashioned), and in developing and maintaining an interest in a wide range of subjects. My postgraduate training is in the discipline of Intellectual History, more specifically the culture of the book and British publishing in the eighteenth century. However, I have a long-term interest in postmodernism and the philosophy of history which stems from my undergraduate degree under the supervision of Prof. Keith Jenkins. I conducted postgraduate research for higher degrees under the tutelage of Prof. Richard Whatmore at the University of Sussex, UK. Outside the Academy, I have co-authored three commissioned books on local English architectural and landscape history, especially historic houses: *Deans Place* (2006), *Stanmer & the Pelham Family* (2007), and most recently *Wingrove & the Churchill Connection* (2010). My research interests are increasingly gravitating towards English landscape, gardening/horticultural history and

the way political and social ideas are communicated through these mediums. Finally, I would like to encourage all my current and future students to be passionate about research, because this passion always shows through in writing and presentations.



新教務補佐からのご挨拶 澤田望

2012年4月よりイギリス科の教務補佐に着任いたしました澤田望と申します。私は大学院の修士課程からイギリス科に在籍し、2006年から留学した英国バーミンガム大学で博士号を取得後、昨年帰国いたしました。私の研究テーマは、19世紀後半から20世紀前半までの英領ナイジェリアにおいて、教育を受けたアフリカ人が出版したパンフレット、年鑑、新聞などの出版物を主な史料とし、彼らが自分たちの社会をどのように描き、内外側に発信したのかについて、歴史的背景と照らし合わせて考察することです。博士論文では、1880年から1920年の英領ラゴスで出版された新聞に記録された任意団体活動の実態と表象分析により、従来宗教・階層・人種によって分断された社会だと書かれてきた植民地初期のラゴスとは異なる側面が明らかになりました。

私のイギリスとの出会いは、父の赴任先であったオーストラリアを通して、旧宗主国に対するやや複雑な

感情を反映した形で始まりました。大学の学部時代は、イギリス史のみにこだわらず、第二言語習得論や文学史などを興味に任せて勉強し、2か月間の語学研修先はアメリカを選択するなど、イギリスから離れていた時期もありました。しかし、偶然ナーディン・ゴードイマの小説を読み、さらに木畑洋一先生と井野瀬久美恵先生の授業に出席して御著書に触れたことの影響で、イギリス植民地への関心が再燃化しました。卒業論文では、ヴィクトリア時代に西アフリカを旅したメアリー・キングズリーを取り上げ、駒場の修士課程入学後は、中尾まさみ先生をはじめとするイギリス科の先生方の御指導の下、「教育をうけた現地人 (educated native)」と呼ばれたアフリカ人エリートについて勉強してまいりました。博士課程では、吉田育英会の日本人派遣留学生としてバーミンガム大学大学院西アフリカ研究所に留学する機会に恵まれ、ヨルバ民族を専門とする文化人類学者のカーリン・バーバー先生とナイジェリア政治史専門のインサ・ノルト先生のもとで研究を始めました。イギリスとナイジェリアでの史料収集やセミナーの合間には、学科内外の友人と食事会や日帰り旅行を企画し、クリスマスと大晦日には博士課程の同僚や指導教官宅で過ごすなど、大学を離れた場での交流も良き思い出です。

現在ではイギリスで過ごした時間を、英語を通して世界を知る充実した日々だったと思い起こすことができますが、博士論文の進行状況に悩んでいた辛い時期には、先を行くイギリス科の先輩方にアドヴァイスをいただくなど大変お世話になりました。在英中にも、何度かイギリス科

出身者で集まる機会を作っていたいただき、帰国後も帰る場所がある安心感に救われました。

本年度からイギリス科の教務補佐員の仕事に加え、他大学でも非常勤講師等として働き始めた関係で、自身の研究に割ける時間が少なくなりましたが、今後も引き続き、英領西アフリカの出版文化史の研究を続け、特にアフリカ人エリートの帝国経験を旅の叙述から考察することが次の課題です。

教務補佐としてイギリス科に努めて半年になりますが、穏やかな雰囲気の中、勉学と課外活動に励む学部学生の連帯感や、大学院生の勉強会が定期的に行われるアカデミックな雰囲気の良い刺激を受けております。短時間勤務のため、学生の方や先生方の助けを必要とすることも多々あるかと思いますが、イギリス科の運営とより良い学習環境の整備に少しでも役立つよう努めてまいります。どうぞ宜しくお願いいたします。



昨年冬学期に、ロンドン大学の Clair Wills 教授 (Department of English, Queen Mary, University of London) が客員教授としてイギリス科で学部・大学院共通の集中講義を担当され、また、講演会も行われました。



講演「The Irish in Britain in the 1950s and 60s: Literature, Class and Social Mobility」

以下は、大学院生による報告です。



クレア・ウィルズ教授の短期集中ゼミ受講記

加太康孝

(地域文化研究専攻博士3年)

昨年度10月、ロンドン大学クイーン・メアリからクレア・ウィルズ (Clair Wills) 教授が客員教授として来訪し、4日から13日まで短期集中による授業を担当された。(なお、ロンドン大学は独自のコレッジ制を有し、各コレッジは事実上独立した別々の大学である。クイーン・メアリはそうしたコレッジの1つ。) ウィルズ教授は現代アイルランド文学・文化研究を代表する研究者であり、従来の学問領域を横断する成果は、いずれも高い評価を得ている。教授を学際的研究の最先端を自負する駒場で迎えられたことは、まことに僥倖であった。

授業は「1940～50年代におけるアイルランドのモダニズム」と題され、信仰や活動の場など多様な伝記的背景を持つ作家たちの、詩、小説、戯曲といった異なるジャンルの作品が扱われた。要求水準は決して低くなかったが、当時のアイルランドの政治・社会的な文脈を丁寧に確認しながらテキストを丹念に読む形で進められたため、必ずしも文学の手法に精通していない学部生も取り残されることなく、テキストをどのように読むべきかという基礎の部分から、学ぶところが多かったようだ(博士課程の私も例外ではないが)。一方で教授は多様なテキスト群を同じ範疇の中で考えることで提起される諸問題、そこから生まれる可能性について議論させながら、同時代の英文

学作品との共通点や、それまでのアイルランド文学から継承されているモチーフを指摘しつつ、「アイルランドのモダニズム」とは何かという大きな主題を提示された(ジェイムズ・ジョイスの『The Dead』に繰り返し立ち戻って考察されたのが、個人的にとっても印象に残っている)。この主題のもと交わされる議論はアイルランドという場に留まらず、モダニズム文学研究一般を豊かにする契機をも有していることが体感され、大変刺激的な時間だった。

教授は休み時間なども学生に積極的に声をかけ、各々の研究関心に耳を傾けられていた。授業に加え、気鋭の学者と研究について相談を持つ事ができ、短期間ながら濃密で得がたい10日間となった。



昨年冬学期より1年間イギリス科の授業を担当された CPAS (アメリカ太平洋地域研究センター) 客員教授の Anne Collett 准教授 (School of English Literature and Philosophy, University of Wollongong) が任期を終えられ帰国されました。10月より後任の Justin Dabner 准教授 (School of Law, James Cook University) が1年間いらっしやいます。また、冬学期には客員准教授として日本医科大学の中村哲子准教授が大学院の授業を担当されます。



コラム

澤田望さんバーミンガム大学 the RE Bradbury Memorial Prize 受賞

正式名称は the RE Bradbury Memorial Prize for the best thesis in the School of History and Cultures at the University of Birmingham という賞で、ベニン王国の研究で有名な R.E. Bradbury 教授を記念したものです。37.50 ポンドの賞金もついています。

Congratulations!



コラム

町本亮大さん一高記念賞受賞

大学院総合文化研究科の大学院生と教養学部の学生を対象とする賞で、卒論に与えられました。

Congratulations!



*「主任挨拶」にもございますが、教養学部後期課程は2012年度に再編成され、2012年度冬学期より新しい組織、カリキュラムになります。イギリス科は、教養学科・地域文化研究分科・イギリス研究コースとなります。現在の3年生が現行制度におけるイギリス科の最後の学生になり、10月に進学してくる内定生は新生イギリス研究コースの一期生になります。



イギリス科よりご案内 2012年度ホームカミングデイ のお知らせ

来たる10月20日(土)に本郷、駒場両キャンパスで、第11回ホームカミングデイが行われます。公式行事については

<http://www.alumni.u-tokyo.ac.jp/hcd/> をご覧下さい。

イギリス科研究室(駒場キャンパス8号館4階402)も、皆様を心よりお迎えいたします。例年通り、午後4~6時頃にかけて、お茶や軽食などを用意してお待ちしております。お問い合わせのうえ、お気軽に足をお運びください。詳細は、追ってイギリス・コースホームページ

<http://british-section.c.u-tokyo.ac.jp/> でお知らせいたします。



卒業生の方へお願い

「イギリス科ニューズレター」は、現在、紙媒体と電子媒体の2種類のやり方で、皆様のお手元にお届けしております。今回、紙媒体でお送りした方で電子化にご協力いただける方は、メールアドレスを

[igirisuka\[at mark\]ask.c.u-tokyo.ac.jp](mailto:igirisuka[at mark]ask.c.u-tokyo.ac.jp) (at mark は@, 研究室アドレスとは異なりますのでご注意ください) までお知らせ下さい。

また、お届けいただいているご連絡先(住所、電話番号、メールアドレス)に変更などがある場合も、お手数ですが、上記アドレスまでご連絡をお願いいたします。

ニューズレターに関しましては、経費節減

と環境・資源への配慮から電子化を進めておりますが、同窓会のご案内など郵送が必要なものもございます。郵送費の資金繰りは毎年厳しくなっております。同窓生のみなさまにご支援をご検討いただけますと幸いです。ご賛助いただけます場合は、以下の口座にお振込みいただけますようお願い申し上げます。

同窓会用の口座は、

ゆうちょ銀行：口座名:イギリス科

口座番号:10090-2-43621671

ゆうちょ銀行の口座をお持ちの方については手数料はATM無料、窓口140円

ゆうちょ銀行以外からの電信振込の場合は、

手数料525円

ネット振込の場合は、口座番号が変わります。

■銀行名 ゆうちょ銀行

■金融機関コード 9900

■店番 008

■預金種目 普通

■店名 〇〇八店(ゼロゼロハチ店)

■口座番号 4362167

どの銀行にお口座をお持ちかによりませんが、手数料は無料あるいはゆうちょ銀行以外からの電信振込、郵便局の窓口振込よりもずっと安くなります。



東京大学卒業生室からのお願い

東京大学卒業生室を通して、駒場祭実行委員会(学生団体)から卒業生のみなさまへの駒場祭支援の依頼が届きました。

以下のホームページ

<http://www.todai-alumni.jp/staff/>

をお読みにになり、ご賛同いただける方はご協力をお願いいたします。

2012年度イギリス科運営委員

西川杉子(主任)、アルヴィ宮本なほ子(副主任)、小川浩之、後藤春美、中尾まさみ、澤田望(教務補佐)